



昔語質屋
庫卷之五

初篇



1161
5子



1161
5



昔語質屋庫卷之五

東都

曲亭馬琴演

第十 紀名虎錦の犢鼻禪

叔子の迹へ喚びてい身の幅二尺五六寸。長一丈有餘。いとも比太く逞
 した大和錦の禪襦垂る厚總熨まど。わたりを拂ふ意氣揚。現古
 の最まうらわと稱噴せらるるいあうそり。當下錦の犢鼻ハ。席上陝と
 夷坐す。嘗ニツツ拍鳴は。妙冲善尼の世又稀ある。孝行の物やう
 心裏感涙を拭ひあへど。うらありあのか中。独角觥の同をかうら
 大人氣うもあつれん吾ハ仁明帝のちん我。御叔氏主をばあひ。力士
 氏長が禪襦あれらも。さうかのありともあうられ。例の白徒が事を好
 了。紀名虎の名を負。傳來帖之物。く。綴るまををま。請む

質屋庫卷之五

つれは笑ひを忍びて。抑人皇五十五世文徳天皇崩し。角鯨の勝
 惟喬惟仁兩皇子位を争ひ。大匠を定めり。角鯨の勝
 負より。即位のべと。まうて。朝議す。一決を。兄の皇子
 互ふ。力士を。勝負を。争ひ。惟仁親王の相撲人。晴す。猪牙
 あり。三司百官。惟仁を王位。即位す。清和天皇。或は
 惟仁親王の。孔雀三郎。業平。美男の。勢。野見
 宿禰も。勝。又。惟喬親王。外祖。紀名虎。を。彼
 業平。番。名虎。力士。天命。所。あり。ん
 名虎。亮の。亮。孔雀の。足。ひ。び。も。負。り。ん
 王。位。心。走。り。て。才。皇子。の。患。ひ。あり。名虎。の。恨。み
 あり。自殺。す。惟喬。も。世。を。慕。ひ。て。墨。の。衣。を。着。す。

の扉を入りて。小説傳奇を。そのまゝ。傳。書。せ。ん
 丁。名。虎。亮。が。晴。と。結。ぶ。梃。鼻。禪。あり。て。弄。賣。り。傍。痛。さ。我
 の。門。刀。根。継。と。名。を。ひ。り。り。大。力。士。伴。氏。長。が。像。見。あり。彼。王。位。争
 ひ。と。名。虎。朝。臣。の。名。高。く。世。俗。の。小。説。な。れ。ば。名。を。了。負。し。ん
 角。鯨。と。名。を。ひ。り。り。名。虎。の。義。理。を。缺。と。も。あ。る。梃。鼻。禪。あり。ん。や
 され。世。より。東。宮。定。り。惟。喬。惟。仁。の。確。執。の。由。り。由。り。の。小。説
 あり。鬼。俣。の。謡。曲。と。し。作。り。天。晴。の。故。事。と。し。の。婦。幼。爺。傳。の。由
 も。あり。ん。と。あ。る。仁。明。の。時。伴。氏。長。小。隨。後。の。清。和。天。皇
 即位。の。時。を。親。し。り。又。其。の。後。二。代。実。録。を。撰。む。に。物
 教。を。り。の。二。代。実。録。卷。の。一。清。和。天。皇。崩。惟。仁。文。徳。天。皇。の
 等。四。子。母。の。大。皇。后。藤。原。氏。太。政。大。臣。贈。正。一。位。良。房。朝。臣。の



傳奇の鹿錯紀名席と
孔雀三郎業平と南船の如

名席

孔雀

女あり。嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯。天皇を太政大臣の東の
 京の一條の茅小生の所へ。十二月廿五日戊戌。小皇太子とあり。此言
 九月のあつちをめぐり。是よりうれ童禱あり。大枝半起天走超騰
 躍止利超天我那護留田那搜阿志食無志岐耶雄伊志岐那
 とを謡ひける。藏者ゆりらく。大枝の大兄をいふあり。この時文徳天
 皇は四皇子をり。まは第一の惟喬親王第二の惟條親王第三の惟
 彦親王皇太子。これの第四皇子なり。天意のぞく。あつちを
 超る。まは。故三超の謡あり。と見えたり。夫即位の國の大事なり。天命
 その君のゆきとあり。心あり。人力のうきとあり。あつちを。纏頭祿物
 小笠。相撲の勝負。任とあり。あつち。この正史をえて。彼小説を思
 ふべし。惟喬惟仁の位あら。ひとあり。絶とあり。第一の出證あり。

一書小清和のえり書けらねたる條よこれらのみ子の東宮
あらそひいひりんもそのみすとそあはれんと記されし一切の
亦ある物も惟喬親王の位事ひは文徳天皇の天安元年二月
ありとたりし書記たり。是より八年已前嘉祥三年の十月惟
仁親王東宮心立あひたる也。惟喬親王の何のあふふるはあらそひを
あはれこれらに絶て論を不足らんと又実録卷の廿六
九月廿六日丙午の條よ無品惟喬親王に封百戸を益めたるなり。
その勅よ朕が庶兄惟高親王に先皇の鍾愛志あふらざるなり。朕が友
手も相厚あらんと敬と云々又宣く骨肉天至遂に跡を殊よと
あつて跌と。緇素道分て仍歎顔を以恨とと親王爵邑を讓
還さの日朕親王の平昔家途肯素成りて唯縣官小仰て分

衛とふらざらざり。其の資資館より更なるも妨事。高情よ性なり
を憚りていま敢て分て今果て夫屢空の事をまぐよ悲愴
へあらば宜彼舊封を全し。その百戸を返さるる衣鉢の費を助て朕が惻
然の懐を慰むべし制と。そののりあひとえたり。あて同年の冬十月八日
癸酉に惟高親王表を上して百戸の封を辞しあひく亦懇に勅答
ありて許しあはるる。同書のみるが巻よえたり。それらよりて天皇
惟喬親王に莫逆よとをりまをさるべし。さるを位あらそひあんといふ
ぬは衣を被せしあひあひの人のあつてありあれ是より先惟喬親王
貞観十四年秋七月一日己卯疾よ寝て出家入道あひりて
小野に閑居あひりて小野親王と稱しあひられ世を憤りて
家あひりあはれと病よとて沙門とありあひりて性なり閑雅を好む。

名利と疎く。よろづ質素小をりまそり。古書のうつゝ推量らる。又清
 和天皇降誕まう。僅九ヶ月が初東宮小立ゆひ。のあは女太政大臣
 良の女。嫡子とをいさむ。又惟喬親王の文徳第一の皇子小をり。
 ませども皇太子はなれざりし。おん母正四位下紀朝臣名虎が女。あて廢子
 らん。されば惟喬のあは女に有常が妹。名を靜子とらん。ひらの腹に惟
 喬親王と加茂の春宮を産。あひぬ。又彼紀名吉成朝臣の仁明
 天皇の養和十四年。二率。まこれより四年を産。加祥三年。惟仁親
 王誕生。ま。い。たり。あ。小。惟喬惟仁の王位を。その相摸人。名虎を
 物と。作し。年代不都合あり。物語やら。又惟仁親王。あ。り。
 孔雀三郎業平との力。を。と。作し。傳奇の作者が滑筆。
 白虎未雀の對を。なり。文徳清和のあ。後。の相摸の。と。

皇紀編運
 結うら文
 徳天皇四
 まりて女
 子。直
 子。女。王。を
 惟喬親王
 の身。二。女
 と。す。の。下
 小。或。ハ。惟
 高。の。女。と
 住。り。た。り
 づ。り。と。り

緋字。た。り。は。は。これ。小。業。平。の。名。を。負。せ。ハ。在。原。の。中。將。の。紀。有。常。
 國防権。元。慶。元。年。丁。酉。と。交。加。り。教。と。す。
 正月廿二日卒。年六十三。あ。と。伊。勢。物。語。小。え。め。れ。ハ。有。常。の。父。の。名。虎。と。業。平。を。め。り。
 一番の相摸。り。亦。し。と。後。の。世。ハ。武。藏。國。葛。飾。の。ほ。ろ。ろ。小。業。平。或。ハ。成。平。と
 小。相。摸。人。あり。し。ま。それ。が。住。り。な。り。ほ。ろ。ろ。の。橋。を。業。平。橋。と。喝。け。り。ハ。土
 俗。の。説。又。因。て。孔雀。の。對。業。平。と。名。つ。け。た。り。と。の。相。摸。の。ゆ。り。を。傳奇
 の。作者。が。筆。と。り。し。れ。惟。喬。親。王。の。東。宮。あ。ら。し。む。り。の。當。時。の
 巷。説。ある。ハ。江。持。抄。に。小。天。皇。皇。帝。徳。徳。寶。位。を。惟。高。親。王。小。讓。ら。ん。の。志
 あり。太。政。大。臣。忠。仁。公。ハ。摠。り。天。下。の。政。を。拱。て。第一。の。臣。たり。憚。る。と。り。口
 より。物。と。る。の。間。漸。數。月。を。経。て。云。或。ハ。神。祇。又。祈。請。ハ。又。秘。法。を。修
 して。佛。力。を。祈。れ。り。真。清。僧。正。小。野。親。王。の。祈。師。あり。真。雅。僧。都。る。

佐賀県立歴史資料館

角能でうめやとえたり。それ今の相模取能喚出の儘鶴の餘夥
方式のれどら小唄らなるるんぞらりんとるるが誰れもあれ代りあつた
まゝやが衆皆膝の進むをちうど若く笑坪よりうよけを。

第十一 袈裟御前苦節の袈裟

折しものれ透間漏る裏白窓の夜風とも小苗奇南の熏つて額都る西
徒が破凡の春のきもまきあめらね秀紋様の操り凡雪の以清ての流法
の水濯がく露凡袈裟御前が苦節の像見と名告はく脱鼻禪の席
を譲るほど小中や小小勝をせめ。ちうが主と頼るは美人のうへ世
の人のうへちやあめあられがうよらんもとありまたれど。ちひさされ人の
あま又いららんも身めらじいり五人の白拍子もぐ。その名を法衣と
いひ袈裟といひ禪師といひ佛といひ千手。ちひの観音をま
ちひの観音をま

菩薩あれども。その傳者略はて知り稀あり。法衣とららり主の袈裟御
前の母公小作り。所縁うつたて。まじと奥の衣河に住れば衣河殿と唱
たり。盛衰記よええ作り。その女児の渡が妻と。あを東といひあれ
ど世の人の衣河は因て袈裟のいと縛号は亦是ある。書まの我
たる。この母子舊の白拍子あるあふ。高緯号は喚れたり。何をりて此
ひとあらは源平盛衰記の衣河が夫誰あるをいひ。ちひ所縁うつたて陸
奥に住するうをいひ。且まうと。顔色も又傳稀あり。このをいひ
ちひあられを白拍子と。いらんも。提あるよ。竹ら。さて袈裟御前も
母の跡を継ぐ。ちうど。ちうど。衆技も。年才十四の。左衛門尉源
渡小ら。ついで。後が妻とあり。あが母の衣河を。別荘小。養ふ。よ
てて。衣河と。稱なる。又禪師といひ。世の。磯の禪師

小静が母あり。佛と加賀國より京のありあつる白拍子とて平相國と思
 りん後、飽きて尼となりた千手、平重衡の囚きて鎌倉に送り程鎌
 倉殿の仰よりと泰と憂たじし重衡終ふ誅せられぬとす。い
 悲と歎き。あまく尼とありまうりし物ありのあつたれば、移りてむ
 ありありぬ。東鑑文治四年三月廿五日の條云。今野千手前卒去。年廿四云。この五人の白拍子の糸竹をりて
 世の人の拵びとあるものからあつて操貞く見裁をり、男もよ
 も恥ぢるをまうり。あつたれど過せあつて師も誅せ成り尼となりて生
 涯行ひとま。我を身を殺し、夫を仏道へ引接む。仏縁あつたりの
 あれば世へ入れ、緇号あつて法衣とひ袈裟とひ禪師とひ佛とひ
 千手とひひり。又一説、衣町の磯禪師が好む仏と袈裟の後才女
 ありとひり。牽強附會の言あるべし。亦あつた五人の白拍子、母の

実名ありぬべけれど、袈裟の前名を東といひは盛衰記に載りあり。
 更と考る所、つとどこればその公烈苦節も自餘四人よりまうりて。數百年の
 の今よりてこの物語をすくりの得を流さるは母のあつた身を汚し
 夫が代りて死するに僅二八の秋あれどもその名の今滅びて現身を殺して
 仁をあらひの命長しとるのひらん理も稱ひていと有が死少女は、亦
 彼盛遠入道文覚のえま渡邊黨より遠藤左近將監盛光が一男。
 上西門院の北面の小藁ありた被へ長谷寺の觀音の行子あつた。その母を
 の袖へ着の羽をぬりと夢えて懐妊して文覚を生むれば、又六十一母ハ四
 十三より奉たる一子とぞさへくらり。多く父母を喪ひて丹波保津の
 莊の十司春木二郎入道道善といふ所の養子成長隨は、鉄面牛皮
 の童あつて、おちぶて声高し。親の教訓をも聽く。他の制止をも用む。

道善も持酔る折彼が一族小遠孫二郎瀬口の遠光とのりのまひ
 して元服さ。父盛光の盛の字と鳥帽子親ある遠光が遠の字
 を合して盛遠と名告らせ。父の跡を踏みて上西門院の北面は春ら
 びふ遠孫武者盛遠とぞ召れり。武藝はくまじき。道
 も又ありもん十七のふ年。不慮の悪行によつて。却北殺か。忽北佛道
 小入てり。盛妻記巻十八は。盛遠が道公の縁故を尋ねば源渡が妻の母
 所云の盛遠が伯母なり。伯母は姨は作の奥の伯母ありあり。一年渡迎の
 橋供養の日もくまじき。渡が妻 嬰装を着恋て思ひ忘れんとされ
 ども忘れられぬ。九月十三日の朝まは小母の衣河が許しのあはれ矢度
 小口を引抜つ。をまは胸前より刺んとせり。衣河は生たる公持
 もぞん。くまじき。とあそく。そのれを問へば盛遠答て。嬰装御前

をばつが妻よせんと思ひたる。渡は棄てて。二年が程。送恨き。こは。
 呀詮歎と一所よ死んとあそく。とろよ衣河の口頭とられて思ふまをま
 らど。ぞろよ命の惜りれば。あま放ちあへ。今宵女界を喰ひて。とも
 めうゆあそく。あんじは随へば。と。と。盛遠の誓よ口を堅め。あそく。
 んと。思ひて渡より。つらむ。あそく。その夜を契。あそく。あそく。
 衣河の城頂。消息書あそく。あそく。嬰装御前を喰ひ。盛遠が。あそく。
 を。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。
 今。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。
 胸。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。
 暮。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。
 小。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。あそく。

聖徳太子。曾てのさひをうつよせん。和山前の不祥ハ。盃をが不祥。盃をが不
 祥ハ。渡が不祥。三ツの不祥が一度又未べれ宿業よりそのつらめと思切ら
 気色あるれば。袈裟のちをうら業して。みんかごは。酒を強く。酔臥さし。酒を
 飲らば。家よまうて。酒を強く。酔臥さし。酒を
 べし。樓よ臥さるもの。髪を捜り。殺しぬ。と信。今小密詔ハ。盃を
 飲て。未て夜討の支度し。つてその夜。渡が家よまのび入。いひはる
 樓小のぼり。つたされば。枕辺よ鳥帽子をめた。帳基了。卧るものあり
 るは。探り小。探るもの。濡る髪を捜り。あせり。只一刀は。首を切らして。
 袖よ裏きて。竊中よ。舊の処より。走出。つて天。由り。あは。帰る。いんま。は。
 渡が首。あいら。ど。あて。叔。ぢの。袈裟。より。あ。る。無。慙。尸。の。女。が。夫
 の命。代。て。り。か。り。め。め。曉。て。ゆ。り。慚。愧。し。郎。堂。俱。し。せ。れ。渡

がかへ。きり。め。げ。門。戸。を。閉。り。音。も。せ。盛。遠。未。ま。ら。し。と。喚。び。内。より
 答。て。面。目。あ。ら。ぬ。ゆ。へ。向。後。人。を。見。糸。が。じ。と。り。の。盃。遠。ま。と。あ。る
 とも。女。房。の。み。ん。首。を。切。り。女。奴。を。笑。し。て。擲。捕。て。糸。り。つ。る。徑。よ。門。を。閉
 死。あ。い。の。ゆ。は。歎。死。の。中。も。嬉。し。く。門。を。閉。り。入。れ。ふ。り。その。ゆ。は。盃。を
 の。首。も。あ。き。女。房。の。傍。よ。臥。さ。り。る。渡。よ。討。ひ。て。腰。刀。を。脱。て。これ。を。遠
 去。り。又。袈。裟。衣。御。前。が。首。を。切。り。身。の。悪。業。人。と。な。り。首。尾。を。家
 を。あ。り。も。匿。さ。び。告。す。と。その。あ。ま。り。ふ。か。憂。り。ん。が。自。害。と。思。つ。る。あ。な
 しく。み。辺。の。ま。よ。め。て。死。ん。と。を。ま。つ。る。あり。と。い。ひ。も。あ。つ。て。頭。を。伸。て。ぞ
 居。さ。り。る。渡。の。あ。ら。び。殺。ら。れ。あ。ら。う。それ。も。刀。の。柄。を。い。入。の。刀。の。あ。ら。う。る。べ
 かり。び。り。や。み。辺。を。殺。ぎ。と。て。死。さ。る。妻。の。活。る。も。あ。ら。う。あ。ら。う。る。べ。れ。若。知
 識。よ。了。を。あ。ら。う。め。れ。も。み。辺。も。あ。ら。人。の。お。小。世。を。捨。て。末。世。の。苦。難。を

遠藤氏者盛遠



源左衛門尉

源左衛門尉



吊んみよを刀を引抜てらうから髪を切てりやんば盛遠の渡を七度礼拝
 してこれら頭髻切切てらう。かく袈裟の前が送書手画の中より。その
 と多々へ深な浅茅が原に送る身ゆいり暗路へ入りてり。き
 母のられを被えて目もられせも消涙叫ぶと限る。涙の際よ。商路
 中も夢よ迷へて逐生ゆひり。身ゆいりくせんきて落髪して尼と
 あり天王寺へ泰教しく。法皇の素懐を遂うゆへと祈念する程よ
 次の年十月八月は四十五歳。これゆへて往生を遂まり。左衛門尉
 渡の僧を請とて受戒して。渡阿弥陀佛と号し。遠藤武者も入道
 して。盛阿弥陀佛と号し。夫ゆ女の屍を後園に葬ると墓を筑せり。年
 間八行道念仏しく。斜るるに吊ひらると。さればや夢よ墓所の上よ蓮
 花開く。袈裟精良その上よ生きてる。その後盛阿弥陀佛日本

圓を修行して求法の志いと苦るる。遂に智者よるり。これ盛阿弥
 陀佛を改めて。文覚とて号し。利根聰明き。有驗せよ。搦れたま
 知法知験の時。まごも昔の女のゆいり。常衣の袖を絞り。
 りや慰むとて。彼女の涙を物とて本まこ。昔は頭よ。恋しん時。も
 られを。悲しん。も。これ。辱。す。む。で。り。の。と。妻。よ。ん。
 高尾神護寺のぼらり。住り。同書卷の。さて。この。一條。の。物。り。の。當。時。
 の小説あり。疑らへ。盛遠渡か。お。家の。ま。ゆ。り。衣。阿。袈。裟。の。名。を。作。設。
 と。飲。又。衣。阿。袈。裟。の。名。と。盛。遠。渡。が。お。家。の。物。語。を。附。倍。たる。歌。よ。
 う。れ。も。既。は。故。り。よ。る。り。ふ。り。れ。が。を。有。り。る。り。て。許。せん。渡。の。妻。の
 貞あり。ん。実。よ。貞。あり。惜。る。る。死。せる。と。の。一。日。あ。り。て。その。身。以。盡。
 遠。小。治。さん。たる。り。千載の送恨。よ。けり。忠臣の死。と。も。革命。成。たる。り。

節操 野操 忠節 也 諡法 自冠曰 若節 易經節 卦云節 貴通中 過則若 矣豈能 盡也

烈女の死ともその身を汚れぬ。よくこれを節操といひて。苦節
といふも。ちうあは後の入りの物語は因にて鳥羽の恋塚の渡が妻の古墳
ありとせり。是否をちうぐとせり。操塚とせり。恋塚の妻をこ
りてこれを恋塚と唱へり。その実を稱ひたり。鳥羽の山城國紀伊郡あり。
鳥羽の北小田塚といひあり。恋塚もその一なり。此は件の恋
塚の北藏堂の南路傍東のこころ。池の中あり。一書に恋塚といひあり。
二所ありて決し。今この塚は遠藤武者が築く所あり。せり。こころ
の沈廣大うと羊あり。鯉あり。住と久き。既又神通をゆへり。
種く奇怪をよとあり。土人駭捕てこれを滅せり。ちうれどもその霊の示を
あるををわめて池の底に納めて。墳を築けり。鯉塚といひたり。

海美のま 霧のま 伊豆國 流るる 古屋手 流るる 流るる 流るる

られ信が。唐山の書。安南龍門の魚の龍とあり。はるる。えり。れど。
既又神通をゆへり。鯉の土人は打殺されし。いふあり。信鯉塚あり。
是ともあり。縁故あり。さても渡の嵯峨の流を汲る源氏あり。
身は桑門とあり。体殊ふ。男子の公ま。似げは。
流るる。出家の後。亦やあり。又盛遠の流。頭を縫ま。
仏にあり。切徳あり。似れども。在俗の俠氣終り。せり。頼朝
卿を激して。兵を護り。中ごろ。平維盛の嫡子。六代の命乞。是
を牙と稱し。その後。又六代。謀叛をせり。その身も再び
流され。大蛇の俠僧の弱れを助。強れを拉。好。平家
平家の悪政を憐。頼朝を激し。既よそのあり。平家滅亡

あつたがを止ぬべし。又六代はせめて。世を覆えんと謀じり。半表半裏。
なを出家人の行状は似ど。俗人といふことどもいと罪少れ所あるはらへ。又
袈裟以前の画像を本その仏とも又頭よりして。諸回を修行し。恋しん
とんあらんを悲しん時。これに予ひし。と盛衰記よるを所実言
あつた煩惱を脱離して。清果をばつ。法印のあつて。西行上人高
屏ある。神護國祚真言ま。請ふとばえし。文覚上人後中を呼
集合。これ縁。西行の名をきくと。いふも。彼は弓矢のあつて。出で
却和歌の紛らじ。虚名を高とる。賣僧あり。這奴り。ま未だ一巻
より。殺さべし。と。その唯悔をあらう。つら。文覚西行と面あひ。と。ま
及。その出塵の高は。感伏し。忽地。怨敵の。いひを轉し。却
これを稱賛。と。つら。の悪言。ま。つら。その成道正覚を

あつて。至て。彼も一時。是も一時。あつて。世よ。只その仁俠を。稱せ
られて。徳行の。ま。文覚の生る。た。その母の羽の。鉄。入。と。夢え
て。高尾の文覚。又。名。高尾の。名。高。り。法。と。
その。渡。が。あ。つ。た。何。を。と。強。女。密。夫。の。悪。名。を。雪。む。べ。き。
り。袈。裟。御。前。を。と。と。盡。遠。に。殺。さ。せ。ん。何。を。と。と。淫。婦。失。節。の。話
名。を。雪。む。べ。き。生。延。道。を。と。と。の。文。覚。の。死。を。と。と。の。世。の。の。袈
裟。の。あ。つ。た。を。惜。む。を。と。と。の。教。の。身。を。殺。す。を。と。と。の。名。を。と。と。の。時。が。と
作り。教。の。い。ひ。を。と。と。の。彼。を。と。と。の。衆。皆。是。非。を。と。と。の。只。管。數。息。を

第十二 九尾の狐の求衣

せんが苦節の袈裟が恋と益常の物ごとく。又席上更。よ。肅然。よ。のく

耳を側はく。いとも愛したる衣と。圓坐する夜の綾綿は。まゝをさうさう
 折めり。忽ち出来る五衣。蘭奢の薫り微妙くて。ふらふらえさめね鞋被
 り。や二の町よりあつねべし。されやうぐれの後町ぞ。同んも忍しければ。
 まみうち親王てわうりたる。當下件の五衣ハ。上坐は推坐す。これハ玉藻
 が物ゆりまて。世俗はあられたる。金七玉面九尾の狐の衣は。とと
 ば。衆皆あつてびとえやうえと。さるるもゆね工をせり。あん身の官女の常は
 殺る。五衣とりありのあつね。衣と名告あつた。あつた。あつた。あつた。
 ある疑りハ。理ア。あつた世の小説ハ。近衛院の女官と化玉藻前と呼
 び。九尾の狐とりありの。原末の土よる。あつた。あつた。あつた。あつた。
 彼が妻と名けけん。その小説の本をある。質なり。が好むるらん。あつた
 ども。彼玉藻傳といふ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

よて。下学集巻の中。後。犬追物の注ハ。云。昔西域ハ。班足王のま
 その夫人悪虐人ハ。過。王ハ。勸。千人の首を取。その後支那
 國ハ。出生。周の幽王の后と。その名を。夜奴といふ。國を滅。人
 人を。心。死。後日本ハ。出生。近衛院の御宇。小玉藻前と。号。人
 人を。傷。極。後。化。白狐。人。害。推。時俗。これ。驅。欲。先。走。犬。追。射。騎。試。白狐。これ。化。石。赤。禽。走。獸。殺。氣。出。當。り。立。故。これ。殺。生。石。今。下。野。の。那。須。野。原。犬。追。物。始。古。老。の。口。号。聽。本。親。を。知。ら。ど。且。く。これ。戒。る。原。本。漢。文。今。國。便。編。者。の。そ。の。書。ハ。文。安。元。年。甲。子。六。月。下。旬。東。麓。破。納。序。ハ。便。編。者。の。

自序の事。後花園帝の御宇。將軍義政公。幼少の時。當てりて。小
 古老の口号。聽とられ。この小説の由。来久し。推とるべし。事のころ
 を推量する。七十四代の帝。鳥羽院の美福門院を寵さる。そのあはれ。
 内外のみる。後宮の進退。より。あひく。世の議も。多く。人
 の恨も。深して。終は。保元の播乱と。なりぬ。それらの。みと。りんと。近衛
 院の宮嬪。玉藻前と。いふ。妖怪を作。り。殺し。あり。ゆ。鳥羽院の。あ。ん。時
 と。あ。り。ど。し。と。近衛院の。久。壽。の。比。小。せ。り。の。つ。る。故。を。と。い。ふ。と。ら。れ。ゆ
 又。本。づ。所。あり。保。元。物。詔。小。保。延。五。年。五。月。十。八。日。美。福。門。院。の。名。得。

大内藤原長實女 御腹小皇子 近衛院帝 御誕生ありく上皇 鳥羽院 殊に悦び
長實女 御腹小皇子 近衛院帝 御誕生ありく上皇 鳥羽院 殊に悦び
長實女 御腹小皇子 近衛院帝 御誕生ありく上皇 鳥羽院 殊に悦び

思召て。何れ。春宮。より。立。あ。り。永。治。元。年。十。二。月。七。日。三。歳。ま。く。御。即。位
 あり。依。り。先。帝。崇。徳。を。ぞ。新。院。と。ぞ。す。ん。る。云。云。あ。り。依。り。先。帝。崇。徳。二。年。夏

のころより。近衛院御惱をり。ま。く。七。月。の。旬。の。日。を。憑。り。少。れ。事
 小。清。涼。殿。の。夜。の。間。に。上。り。ま。り。終。は。七。月。廿。二。日。小。隱。れ。さ。る。あ。り。年
 十七。近衛院と。れ。る。新。院。の。あ。の。時。を。す。え。身。を。位。に。復。つ。と。ど。も
 重。仁。親。王。の。一。定。今。度。の。位。は。即。せ。あ。り。と。結。ま。さ。る。を。り。す。て。天。の
 の。諸。人。も。さ。る。あ。り。存。り。ぬ。如。し。思。の。外。に。美。福。門。院。の。御。討。ひ。あ。り。後。白。河。院
 仁。其。の。時。の。四。の。宮。と。さ。う。ち。新。院。と。さ。う。ち。を。御。位。に。即。ま。り
 う。が。高。れ。も。錢。れ。も。さ。ひ。の。外。の。さ。ひ。ひ。り。四。の。宮。も。故。待。賢。門。院
 璋。子。推。言。推。言。推。言。の。御。腹。ま。く。新。院。と。御。一。腹。あ。れ。ば。女。院。の。御。名。あ。り
 公。実。の。女。の。御。腹。ま。く。新。院。と。御。一。腹。あ。れ。ば。女。院。の。御。名。あ。り
 苦。し。み。継。あ。れ。ば。美。福。門。院。の。御。名。あ。り。重。仁。親。王。の。位。は。即。せ。あ。り
 として。猜。を。ら。せ。あ。り。て。この。宮。を。女。院。の。と。り。進。ら。せ。あ。り。は。皇。

璋子推言推言推言 の御腹まく新院と御一腹あれば女院の御名あり
公実の女 の御腹まく新院と御一腹あれば女院の御名あり
苦しみ 継あれば美福門院の御名あり重仁親王の位は即せあり

として。猜。を。ら。せ。あ。り。て。この。宮。を。女。院。の。と。り。進。ら。せ。あ。り。は。皇。

新院咒詛しんいんじゆそなりあかるとんめりける。これよりして新院の根
 一は塔らをあかゆ理とらをあかゆりと云ふをあらべし。近衛院の美福
 門院の腹を世を御うらをよをみと十四年。ちん年僅ちんねんをんは十と成物の怪ものけ
 ありて。俄あはれは崩たふさまひぬ源三位頼政卿げんさんい。和合わがひを宗むねて夜よ
 南殿なんてんのうへまて啼なる妖怪やうかいを射やるをいふ。この帝ていのちん
 時とき平家物語へいけものがたりとゆえたれば。序ついでに九尾くわいびの老狐らうこが玉藻前たまもと
 女官にようかんは化まじる。帝ていを悩なやまし小陰陽頭せういんやうとう加茂保親かまほり
 されて下野しもの國くに那須なす形かたちを去いるを三浦みづら女によ美明みあき上かみ徳とく女によ廣常ひろつねは仰おほす
 狩かりらとめ小形せうがたは狐この脱だつりて遂つひに化まじる石いしなりつ。その後源のちげん公羽和こうわ
 尚なほ下野しものは起おこれり。狐この化まじる殺生石ころしやういしを銘めいめたりといふ。唐山たうざんも
 黄石望夫石くわうせつぼういしありと申まをした化石かうせきのふと。いとあかより物ものも由よし我われと申まをす

俗説よくせつは狐こ
 の化まじる
 藤原ふじわら
 と云いふ又また西
 陽やう雜ざ姐せの
 融ゆう融ゆう
 だん此こ斗とを
 拜をむ
 周しう
 又またの生なま
 又またの生なま

是こゝ當時たうじの小説せうせつあるが信しんと云ふは是こゝらぞ。證しやうと云ふは是こゝら。但たゞ巨石こゝろいしの怪けを
 可からぬ。和漢わくわんよその例れいあり。ゆれば件けんの殺生石ころしやういしも砒石ひいし。砒石ひいしの類るいあり。毒
 石どくも鬼魅おにまられよと云ふは。源げん前ぜんの法ほふに。今いま古こ今いま未生みせいの玉藻たまも
 前まへが。又また附會ふくわいと云ふ。けり。さうゆられぬ。そのとまれば。あま。この
 一條いっとうの物ものや。美福みふく門院もんいんのふと。小比良せうひらと。作つく設せつたり。よるん。されば。世よ和わ
 國くにの怪けを。并ならひ。周しうの喪さう奴にと。唐山たうざん演義えんぎの書しよ。殷いんの紂しゆう
 の寵ちゆう妾せうせつ蘇そ姐せ已い。九尾くわいびの狐この化まじる。作つくるを。後のちあり。よも。要えい奴に
 を姐せ已い。白狐はくこは九尾くわいびの二ふたを。被かて。これを。四傳しでん末まへの惡あく狐このり。あ
 る。夫おつと殷いんの紂しゆう王わうの時ときなり。我朝わがしやう近衛ちかゑ帝ていのちん時とき。至いたり。抑おさ載ざい
 たり。和漢わくわんの年代ねんざいあり。よを。不ふ都と合がる。小説せうせつなり。よ。ま
 して。唐山たうざんの書しよ。藉せきも。涉せつ獵りやうて。證しやうと云ふ。九尾くわいびの狐この瑞獸ずいじゆうあり。し。

ゆのふの矢を
つら小のこ
あられの
のふの承

兼倉
右大臣

妖狐玉藻



三浦義明

まの書
の画國
ハそそ
吉里蒙
るまは
かか古
風この
アま
くみ
みあ
るま
とま

三浦の
西の
那須野
九尾の
狐を
討つ

上總次廣常



彼人を食ふことありの昔九尾の狐ありと其の状狐の如くあり
 九尾ありとて又俗談は狐の肉を喰ふの彼は魅きとて其
 中の餌茶とてあり山海経に所云九尾の狐の物を畏怖する状
 ければ九尾の狐の増べたるのよあらんと古人の説ところ麒麟勿勿處
 天録よりいれ端獸なり且白虎通より九尾の狐は九尾その所を
 了は孫養日身又慈とてありとて九尾の狐が宮墳に化す。二酒は妖
 孽の酒を滅し人を害するところその善惡吉凶の反覆を見
 る。虚実をばあつぐらあるべし。和漢の人情異なるにあつ。只奇と好
 不祥を喝ふのそ彼九尾の狐の増獸ありとてあらば孔聖獲麟の歎嗟
 久しう久し又狐は首九尾尾九尾のありて山海経の鳥の山は獸ありその
 状狐のごとくあり九尾九首虎の丘ありと名はけしとて蟹姪といふその音

嬰児の如しこれ人を食ふと云われらるる名ありといふべしその實を考
 らざる奇獸あり。されば九尾の狐といふものごとく流りてあり。あらば物あり
 ありとて。但九尾の馬の所見あり九尾の狐の管見あり。東鑑建久四
 年七月廿四日。横山権守時廣一疋の異馬を引て。將軍頼朝を
 覽あり其の是九尾あり。前見あり。是所須波路國國分寺の辺に出
 の由去五月の比告あり依て怪れを召寄の昔言上とて左近将監
 家景に仰り。陸奥國外濱に放さるべし。云々同五年六月十日。徐
 りて云横山権守時廣が献する所の馬。真勿く流遣はす。伴の男。皇
 大建隆五年が家。併途中に煩ありて。これを射殺した。絆則頭露に。
 身の早速電せり。主人に仰り。身やさるの処近曾適これを召進
 る。とてんえたり。それらの世話よりか生をとりひりて。過體廷弱不具の

類ををられを奇うと損うといふも。視て亦竹の益うあらん亦彼玉
藻侍といひの。小説あるうへんもあれ。只この小説は又母あることを
考ど。九尾の狐の瑞獸あるうをあらざるの。おまむ。驚き。作よこ
せ。といふ折う。遠寺の鐘声幽みはえて八声の鶏も乱と啼。見臺
先生身を倒秋の夜のいと長たも。今いと明るよ。止らんく。と
推禁れ。表が後よ詰りある。天物の血取剪。鎌倉時代の上。下。
米糞上人の乞食袋。木つら。とあるが。先生よ。對ひ吾們的。さるもの
みあらざといふも。又。おまむ。あな。もゆる。あは。明る。あは。後。あは。まき
か。この。と。これ。い。送。憾。と。が。ろ。も。よ。成。見。臺。先生。は。も。あ。ぞ。ぞ。の
恨。い。と。う。う。あ。れ。も。あ。る。圓。居。を。あ。め。ひ。作。と。り。今。宵。よ。の。と。限。る。ん。か
ら。ん。既。よ。の。席。よ。別。る。め。の。久。米。仙人。が。墮。落。の。彭。翁。行。平。の。紀念。の

烏帽子狩衣。燈臺。花山院の禪衣。佐野源九。南門が。漸離
腰巻。この餘の。糞。毛。筆。る。よ。違。あ。り。ど。縦。名。も。あ。れ。古。夜。あ。り。も。
あ。の。と。あ。ら。ん。あ。い。文。吾。が。袴。も。義。太。が。股。引。も。俄。鞆。夫。の。腰。巾。着。も。
杉。ね。前。の。杖。臺。も。漏。さ。ぶ。う。ハ。お。り。も。ど。天。も。明。く。の。あ。ひ。も。只
翌の夜を俟あ。とい。と。叮。嚀。よ。説。示。日。び。さ。る。有。理。と。成。あ。る。声。と。も
ろ。も。よ。殿。の。燈。燭。忽。地。よ。一。度。よ。滅。く。寂。莫。く。宝。樹。の。奇。異
の。あ。ひ。を。あ。つ。又。翌。友。の。夜。と。契。あ。る。も。是。も。さ。ず。又。驚。る。れ。が。階。よ。土。庫
の。内。より。出。て。舊。の。と。と。又。積。し。は。い。あ。ら。ず。外。房。小。入。り。り。

第一卷。友切丸の腰よの。おまむ。あ。ら。ん。あ。い。文。吾。が。袴。も。義。太。が。股。引。も。俄。鞆。夫。の。腰。巾。着。も。杉。ね。前。の。杖。臺。も。漏。さ。ぶ。う。ハ。お。り。も。ど。天。も。明。く。の。あ。ひ。も。只
翌の夜を俟あ。とい。と。叮。嚀。よ。説。示。日。び。さ。る。有。理。と。成。あ。る。声。と。も
ろ。も。よ。殿。の。燈。燭。忽。地。よ。一。度。よ。滅。く。寂。莫。く。宝。樹。の。奇。異
の。あ。ひ。を。あ。つ。又。翌。友。の。夜。と。契。あ。る。も。是。も。さ。ず。又。驚。る。れ。が。階。よ。土。庫
の。内。より。出。て。舊。の。と。と。又。積。し。は。い。あ。ら。ず。外。房。小。入。り。り。

質屋庫 卷之五終

曲亭翁性耽著作嘗讀有用之書以筆于
無用之書其讀有用之書也若無用為其
為無用之書也若有用為莊子曰知無用
而始可與言用矣善哉言也翁善遊有無
則其書作意何淺之有是故事取凡近而
理較著閱則亦足以慰閑寂降睡魔况若
是編博學和漢故事以辨俗說虛錯却呈
之兒戲不自誇其論之高也或批之曰俗
說辨下出于諺草上予謂不然也設夫此

之蟠龍辨則難以為兄難以為弟但其詞
荒唐而以失實者有之故雖云味免君子
嗤笑其所發明亦足以醒蒙昧矣且仰述
千載之毒俯辨雅俗之殊似下一目一耳所
親聞觀之非一朝一夕著述者是故言成
燈下之戲墨意有前史之所病豈不以其
所戲謔者小所論辨者大乎後世輕才諷
說之後皆驚而其知不相及焉昔者于令
升撰集古今神祇人物變化名曰搜神記

劉惔稱之為鬼之董狐。今吾有取于是書。亦復稱翁為小說之董狐。請海內好事者。徒尤其文鄙陋。勿與世冗藉同日而論。甲

文化七年庚午肇秋下澣

江湖陳人魁菑撰



鈴木武筭書



編者一稱見于印中

勝川

嶋岡節亭



工画

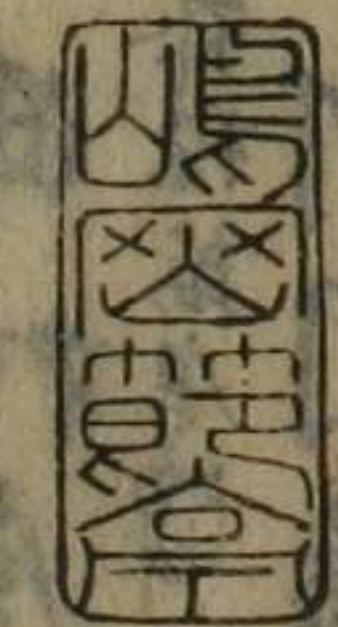


春亭

筆執



鈴木武筭



文化庚午季夏起稿
同季秋列成
一之卷 三之卷
京都井上治兵衛
二之卷 五之卷
大坂山崎庄九郎
四之卷
同 市田治郎兵衛
右刻人

才非馬卿 野相公句
彈琴未幾

○崇徳院天狗の爪取

○鎌倉時代の上下

○米羹上人の乞食袋

右初編總目錄中余裁と云ふ巻数既にかざるありて釐て次編の首巻小入とす

昔語質屋庫中編五冊

初編小漏と舊衣古器小たぐへく
故事と俗説と辨む 近日嗣出

同後編五冊

人間日用の衣裳器血木小たぐへく人情の赴く所と
悉く榮枯得失の理を説き初編と異なり

右全部十五冊あり今これと初中後三篇と改むく賣出さるるに備

陰騭太郎黑白論 曹亭著近刻

天文地理雲雨風雷霜雪の成り
と童蒙の爲小まじく説和げと草紙と

著作堂 燕石雜誌 全六冊

和漢の故事と奉て俗説の根と辨じ、
然て他者の考を載る物誌のありて

月氷奇縁 全五冊

新累解脫物語 同 上 全五冊

松染情史 同 右 全六冊

俳諧歳時記 四季詞寄 増補の注 全二冊

曲亭の将画質のあり取次

此書は河内書肆 柏屋羊藏
大坂兼持齋唐物所 河内屋を助

右四方の需は悉く人の辨じ請ふてより次より本房の外は物小あり

文化七年庚午冬十一月吉日發販

江戸馬食町二丁目

西村屋 共 八

綉梓書賈

大坂心齋橋筋唐物町

河内屋 共 卅

